

韓国南部・釜山の室内射撃場で日本人観光客ら十一人が死亡した火災に胸を痛める人がいる。銃犯罪の被害者遺族らでつくる市民団体「ストップ・ガン・キャラバン隊」(東京)の砂田向志(さだたけむし)代表だ。「元気に旅行に出た家族が、無残な姿になって帰ってくる。遺族の気持ちがつまらない」と訴える。



砂田向志さん

年に団体を設立。九八年、日本旅行業協会を通じて旅行業界に海外での射撃ツアーを自粛するよう要請した。

砂田さんの長男は米ニューヨーク州に留学中の一九九四年、自宅に帰ったところを強盗に射殺された。二ば、観光客が現地で自由に十二歳だった。銃による犠牲者をなくそうと、ほかの被害者遺族らとともに九五

「今は日本の旅行会社が

射撃ツアー もうやめて

胸痛める銃犯罪被害者団体

砂田さんは強調する。

日本人観光客でにぎわうハワイのホテルには、射撃ツアーの日本語パンフレットが置かれている。韓国、米国西海岸、フィリピンなどの射撃場も日本人観光客が多い。「客の大半は会社員ら普通の生活者。銃マニアだけではない」と話す。団体が二〇〇二年に民間のネット配信サービスを利用したアンケート(約千四百人回答)では、51%が「銃は知らないし、撃ちたくない」とし、5・9%は「所持したいが、撃ちたくはない」と回答。一方、37%は「銃は知らないが、撃つてみたい」と答え、年齢層を問わず、三人に一人に射撃願望がある結果が出た。砂田さんは「銃は人を殺す道具以外の何でもない。射撃場では暴発事故で亡くなる人も多い。日本政府は海外の射撃ツアーへの参加を自粛する呼び掛けなど、命を守ることに真剣に取り組むべきだ」と話している。